

項目	評価の観点	評価		項目に関する分析・意見・提言 など (○職員 ◇学校関係者)	今後の改善に向けて	
		職員	学校関係者			
確かな学力と個性を伸ばす教育の推進	主体的・対話的で深い学び	互いに認め合う支持的風土を育てる学級・学年集団づくりに努めた。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ○ペアやグループでの話し合いを取り入れることで児童が考えを深めている様子が見られる。 ○校内研究の取組や先達校訪問での学びから授業改善に努める教員が増えた。普段の授業についても教師が互いに参観できるようにしていけるとよい。 ○「めあて」「ふりかえり」については教師・児童ともに定着してきた。子どもたち自身が目的意識を持って学習できていると感じる。 ○ペア学習やグループ学習を活用した「学び合い」について学ぼうとする先生が多く、学習指導について改善しようとしている。 ○「学び合い」のルールや、発達段階におけるめざす姿などを示せるとさらによい。児童が話し合う課題やそのねらいという点でさらなる工夫が必要である。 ○体験学習を多く取り入れ、学習の中で児童の考えを発表する場を設定してきた。 ○児童会テーマを掲げ、テーマの達成に向けて委員会や学級での取組を考え実行できた。子どもたちが自ら課題に気づき解決していける機会を設けた。 ○学び合いを取り入れた学習の流れは定着してきた。児童の学びに対するアンケートをとり、取組の成果の指標として学校全体を見ていく必要がある。さらに、学び合いが学習目標達成に適切であったかや、どんな場面での活用が有効かなどを深めていけるとよい。 ◇授業を参観する度に、考えるプロセスを大切に授業づくりが進んできているのを感じる。 ◇「学年×10分」の家庭学習の定着を、学校と家庭が連携して取り組むことが大切である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新学習指導要領をもとに、今後、必要となる「学ぶ力」についての共通理解を図り、本校の児童の実態に応じた「主体的・対話的で深い学び」を育む授業改善を目指す。 ・他校の取組も参考にしながら研究を組織的かつ継続的に進める。
		協同する体験・伝え合う喜び・コミュニケーション能力の育成を図る授業の工夫改善に努めた。				
		「めあて」「ふりかえり」や学び合いを取り入れた授業づくりを行うなど、主体的・対話的で深い学びを追究する授業研究や研修会に取り組んだ。				
	道徳教育の充実	生命を尊重する心やいじめを許さない態度などの道徳的実践力を育てる活動を工夫した。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ○「特別の教科」になるということで、時間をかけて教材研究をする時間を持てた。 ○実際の道徳の授業の進め方についての研究会を、校内の教員間で気軽にできるとよい。 ○例年行ってきた授業参観（道徳）を、「道徳参観」として保護者に伝達し、学校としての取組を保護者へも知らせる場となった。 ○道徳の授業や人権週間等の取組を通して、全校で「思いやりの心」が育ってきているのを感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・良い資料は学校、学年で共有するなど、資料の質の向上に努める。 ・学校行事や学習内容との関連を意識しながら、そのときに応じた資料を活用し、道徳の時間を要に道徳教育を進めていく。 ・校内研修や教材研究を積極的に行っていく。 ・引き続き「道徳参観」の場を持ち、学校としての取り組みを保護者に伝えていく。
		道徳の教材研究を行い、資料の整備に努めた。				
		道徳の時間を公開するなど、保護者や地域との連携も視野に入れて道徳教育に取り組んだ。				
	体力づくり	たくましい心と体を育てる魅力ある授業の工夫改善に努めた。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ○マラソン大会について、苦手意識やプレッシャーから不調を訴える子が多く見られた。精神面のフォローが必要と感じた。 ○秋、冬もダッシュタイムのような外でいきいきと遊べる企画があってもよい。 ○ダッシュタイムやRUNRUN月間など、体力テストの結果をふまえた取組ができていた。また体を動かそうとする意欲につながった。 ○体育の授業の工夫改善については、まだまだ全職員が共有できていない。 ○OTSUスーパートライと関連して、体力に自信のある児童が取り組める行事が開催できた。 ○RUNRUN月間など学校全体で運動をしようという雰囲気良かった。 ○体を動かすことに意欲的な子が多い。特に持久力を高める取組に対してひたむきに活動する姿が見られた。 ○体育主任を中心として取組の度に連携がとれた。 ○学習カードを活用することで、子ども自身がめあてを持って取り組むことができた。 ◇地域での体力づくりに関わる取組についても、地域としてのねらいを踏まえ、無理のない範囲で進めていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ダッシュタイム（短距離走）」「ランラン月間（長距離走）」「なわとびカード」と学期でテーマを設けていることで、児童もめあてを持った体力向上につながっている。また、どの学期で取り組むかについては、他の学校行事や大津市で実施されている「OTSUスーパートライ」との関連を踏まえ、より効果的なものとなるよう検討する。 ・効果的な指導方法や学習カードを活用した授業づくりなど、体育の授業づくりについて共有できる場を設定していく。
		ダッシュタイムなど、運動に親しむ環境づくりや体力づくりを推進する運動実践に努めた。				
		体を動かす気持ちよさを体験させ、進んで体を動かそうとする意欲の育成に努めた。				
	指導改善（組織的・計画的	指導体制・指導方法の工夫改善に努め、学力向上を目指した。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ○どのクラスでもテレビ等のICT機器の活用ができています。より有効な活用については、今後も研修していきたい。 ○ボイスワープの設定後、見通しを持って職務に取り組む職員も増えてきた。 ○長期休暇中に教員研修を企画し取り組めた。 ○本校職員のニーズだけでなく、児童の実態や社会の教育動向を踏まえた課題となる研修を取り入れていくべきである。 ○OJT推進教員を中心に若手教員の育成につながる研修ができています。 ○OJT研修の一つとして多くの先生が放課後勉強会で学び合っている。 ○職員研修等で、授業の質を向上させる機会が持てた。 ○働き方改革をめざし、効率的に仕事をしようとする意識がある。 ○学年によっては教材研究に要する時間が多くかかかったり、限られた時間の中では学年会等で十分に共有できなかったりすることもある。教材研究や会議の持ち方等の効果的な方法を考えていく必要がある。 ◇若い教師が多いことを好機と捉え、働き方についての意識を変えられるとよい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「全国学力・学習状況調査」や滋賀県の「学びの基礎チャレンジ」を実施し、結果を分析する。本校の強みや弱みに応じた授業改善を図る。 ・校内の掲示できるスペース（階段や掲示板）を利用し、学力向上につながる取組をすすめる。 ・学年で活用状況を交流したり、学校全体で研修の場を設けるなどすることにより、ICT活用が学校全体のものとなるようにする。 ・教師が余裕を持って児童に向き合えるように、学校での働き方改革を推し進める。
学校全体として指導力・教育力の向上を目指し、職員研修に努めた。						
働き方改革や教育活動の質の改善に向け、計画的な準備・役割分担・ICT活用などの取組に努めた。						
育ちと学びを支える連携	保護者との個別相談や必要に応じて関係機関との連携を図り、子育てに対する積極的な支援に努めた。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ○HPの改修の必要がある。 ○メール配信の登録率が90%以上になり、不審者、緊急連絡等の発信がスムーズになった。 ○適宜、メール配信等で保護者への連絡を行っている。（定着してきている） 	<ul style="list-style-type: none"> ・スマートフォンでのHP閲覧が増えていることもあり、現行のものよりも閲覧しやすくなるよう、HPの刷新を検討する。 ・HPの更新が円滑にできるよう、発信する情報に関連する担当で作業を分担するなどし、一部の職員の過度な負担にならないようにする。 	
	ファミリー学習参加や地域安全マップなど、保護者・地域との交流や情報発信、参観、懇談会の実施や地域人材の活用に努めた。					
	家庭・地域と連携しながら防犯・防災教育の推進を図るため、メール配信やホームページなどを活用して情報発信をし、安心・安全な学校づくりに努めた。					
保幼小中の連携	保幼小中の連続性を意識し、子どもの校種間交流や教師の出前授業などの具体的な連携に努めた。	B	A	<ul style="list-style-type: none"> ○保幼小中連携として行事の交流等は担当を中心にできている。 ○育ちの連続性を意識して、ねらいを整理し、行事の精選も必要である。 ○保幼小中との連携において2学期後半の秋祭りへの招待等、精選できるものはないか再検討してもよいのではないか。 ○唐崎人権教育研究会（唐教研）が、年間計画的に開かれており、校種を超えた職員間での連携の機会が定着している。 ◇他校園との連携ができていていると感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・担当を中心とした取り組みを継続しながら、担当外へも各行事等の実施報告をする。 ・関連する行事を精選し、一つ一つの取り組みの指導効果を高める。 	
	唐崎人権教育研究会（唐教研）など、保幼小・小中の校種の枠を超えた合同研修会を実施した。					
	保幼小連絡会、小中連絡会、体験入学の際など、校種間の授業公開や教育内容などについての交流に努めた。					
組織体制の充実	日ごろから子どもとの関わりを意識的に高め、子どもが気軽に相談できる雰囲気づくりなど、諸課題の早期発見、日常的な予防指導に努めた。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ○問題行動が起きたとき、学年、担当など共に組織的に対応、指導できた。 ○学年間やフリーの先生方が熱心に子どもと向き合い、一人ではなく組織で子どもを指導、支援をしている。 ○学級の枠を超え、学年の子どもをみんなで見るという意識を持ち、学級の様子を学年で交流し、問題を学年全体で共有し解決を図る対応をしている。 ○休み時間の室内での遊びのきまりが曖昧である。持ってきていいカードゲームの種類や休み時間の教室PCの使用法など、ルールを共有すべきである。 ○11月中旬の服装、名札、廊下右側歩行の強化週間はとてもわかりやすく子どもにも伝わった。テーマを変えて、毎回強化週間をしてもよいのではないか。 ○児童会、委員会が主体となり、児童自身が唐崎小学校をよりよくしていこうという活動、提言がよくなされるようになってきた。 ○委員会活動も連携し子どもたちの声で廊下歩行などの呼びかけをしていることの効果が出ている。 ○あいさつを校内では子どもの方から声をかけてくれることが増えた。 ○廊下歩行の励行や挨拶運動に関して取組が広がっているが、実態としては子どもたちの意識に差があるので継続する余地がある。 ◇道徳科とも関連させて、学校として自信を持って取組を続けていってほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・問題行動や不登校、いじめ対応について、学年を中心とした組織対応を継続していく。 ・「くらしのやくそく」について周知徹底を図り、どの学級でも共通の指導を行う。また、内容については必要に応じて柔軟に改善していく。 ・児童の意欲を生かすことにより、児童会活動を活性化させる。また、自治力を高める取り組みに努める。 ・月毎や週毎の重点指導項目を掲げ、よりよい生活づくりの雰囲気高める。また、項目については児童会テーマと関連させ、指導の効果を高める。 	
	問題行動や不登校などの課題に対して、学年・担当と共に組織的な指導・支援ができた。					
	あいさつ運動、唐崎の子ども「くらしのやくそく」、いじめ対応など、家庭・地域・関係機関との連携による指導に努めた。					
	支援を要する児童の個別の指導計画を作成・活用し、支援に努めた。					
特別支援教育の充実	支援を要する児童の個別の指導計画を作成・活用し、支援に努めた。	B	A	<ul style="list-style-type: none"> ○特別支援部会で課題のある児童の様子について確認し、どんな支援が必要かを共有しどのように対応していくか話し合いができています。 ○学校以外の関係機関などにつなぎやすい体制になっている。 ○個別指導計画を作成しているが、果たして必要なか？と思う児童もたくさんいる。 ○個別指導計画の作成はしているが、活用については十分とはいえない。本当に児童が必要とする支援が具体的にできているだろうか。 ○個別指導計画を作ることで、保護者と懇談する機会が増え、気になる児童に対しての共通理解が図れた。保護者への開示もずいぶん進んだ。 ○立てた個別指導計画に対して実行がどこまでできているかの検証が必要。計画を作成したことで、保護者を安心させていないだろうか。 ○個別指導計画の有効な活用についての研修をしてはどうか。 ○個別支援計画の作成に向けて、担任、保護者、児童と共に考えていくことの大切さを感じる。 ○保護者の希望は優先だが、学校としての意見を持って就学相談に望むのがよい。学校としての就学相談への手順をしっかりと踏んでいく必要がある。 ○特別支援を要する児童への理解に向けた啓蒙については、全校児童だけではなく保護者に対しても必要であろう。 ◇特別支援教育に関する要望はこれからも増えていくだろうが、適切に進めていってほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研修会を実施し、個別指導計画の活用について共通理解を図る。 ・支援を要する児童の理解や支援の在り方について、事例を通して理解を深める。 ・個別指導計画の年間スケジュールを見直す。 ・学校全体で就学相談を勧める児童を確認し、支援していく。 ・保護者の意向を聞きながら、組織的かつ円滑な対応により就学相談を進めていく。 	
	組織的・計画的な特別支援教育の体制づくりに努めた。					
	巡回相談などを活用し、関係機関と連携した相談体制の充実に努めた。					